

ちから スポーツの力 ～する・みる・ささえる～

スポーツボランティア

スポーツを「する」「みる」以外に、イベント運営やチーム指導などをサポートし「ささえる」ことも、スポーツ活動の一つです。

近年、規模が大きくスタッフが不足するスポーツイベントに協力したり、参加者が楽しめる企画などを通じて、選手とともにイベントを盛り上げる「スポーツボランティア」が大きな力を発揮しています。東京2020オリンピック・パラリンピックで全国から多くのボランティアが参加したことなども契機となり、認知度が高まっています。

昨年3年ぶりに開催した「伊賀上野シティマラソン」でも地域や企業の皆様のご協力に加え、県内各地から多くのスポーツボランティアが参加し、

「大会を支えるやりがい、達成感を感じた」「選手たちの楽しそうな姿を真近に見ることができ、一体感を感じた」などの声をいただきました。

皆さんもぜひ「ささえる」ことでスポーツ活動を楽しんでみてはいかがでしょうか。

三重県スポーツ協会には、スポーツボランティアに登録することで県内のイベントの運営に参加できる制度があります。詳しくはホームページをご覧ください。



【問い合わせ】 スポーツ振興課
☎ 22-9635 FAX 22-9694
✉ sports@city.iga.lg.jp

伊賀の歴史余話 30 西山に建つ二つの 自然災害伝承碑

近年、数十年に一度と言われる集中豪雨による被害が、全国的に増加しています。

記憶に新しい「平成30年7月豪雨（西日本豪雨）」で大きな被害を受けた広島県安芸郡坂町の小屋浦地区には、明治40（1907）年に土砂災害があったことを伝える石碑が設置されていました。しかし、その内容は地域住民にあまり知られておらず、過去の災害の教訓は風化したものとなっていました。

このことが契機となり、平成31（2019）年、国土地理院は「自然災害伝承碑」の地図記号を新たに制定し、防災意識の向上に役立てるため、同院ウェブ上で全国の伝承碑の情報を公開しています。

伊賀地域でも、これまで豪雨災害を繰り返して経験しています。中でも甚大な被害をもたらしたのが、昭和28（1953）年8月14日から翌日未明の豪雨によって発生した「東近畿大水害」です。

「山津波」と呼ばれる大規模な土



▲山津浪水害遭難死者之供養塔（果号寺）



▲山津浪記念碑（西山公民館前）

文化財課歴史資料係
☎/FAX 41・2271

砂災害に襲われた西山には、二つの伝承碑が建てられています。果号寺境内の「山津浪水害遭難死者之供養塔」は、昭和32（1957）年に建立されました。西山で犠牲となった14人の氏名と年齢が刻まれています。

西山公民館前の「山津浪記念碑」は昭和35（1960）年に建立されました。その碑文には、西山の被害状況、各地からの支援物資や奉仕隊の来援に対する感謝の思い、災害から7年の歳月を経て復興の大略が完了したことなどが記されています。最後の一文は判読が難しい状態になっていますが、「山津浪忘るゝ頃に」と見えます。

身近に残されている伝承碑には、災害の記憶を次世代に継承し、再び犠牲が出ないようにと願う先人の思いが込められています。

明日に向かって ～差別をなくしていくために～

人権について考えるコラムです。

戦争と人権

－青山支所－

ロシアのウクライナへの軍事侵攻のニュースを見ると、満州からの引揚者であった父の話を思い出します。

昭和12年に満州で生まれた父は、自然豊かな満州の街で、中国人の子どもたちと夏は魚釣り、冬はスケートなどをして一緒に遊び、近所にはロシア人も住み、戦争が始まるまでは国籍に関係なく穏やかな生活を送っていたそうです。

父が小学校低学年の頃、上級生はスコップで敵の戦車を落とす穴掘りにかり出されるようになりました。ある日、父は「敵の戦車の下に爆弾を持って行くように」と言われましたが、その日は上空を、飛行機が翼を左右に振りながら飛び、また爆弾は手渡されませんでした。思い返すとその日が終戦の日だったそうです。

終戦後も混乱の続く満州で、ある日、父は軍人で

あった祖父に連れられ、日本の人たちが手りゅう弾を作っていた所に見学に行きました。そこには三重県出身の人も居て、「日本に帰ろう」と三重の話をしてくれたそうです。

その後、手りゅう弾の導火線の試しを行うことになり、父はその真後ろに立っていました。しかし、試しはうまくいかず、手りゅう弾は暴発し、手りゅう弾を手を持っていた人はそのまま亡くなったそうです。

戦争は多くの人の命を奪うだけでなく、人と人が憎み合うよう仕向けます。個々の人に憎まれる原因があるのではなく、戦争が憎み合う関係を作ります。戦争は最大の人権侵害であり、たくさんの人の人生を狂わせ、悲しく辛い思いをさせます。今、世界で起きている戦争を他人事と思わず、自分に何ができるのか考え続けることが大切ではないでしょうか。

■ご意見などは人権政策課 ☎ 22-9683 FAX 22-9641 ✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp へ

IGAMONO セレクション No.4C

【問い合わせ】 商工労働課 ☎ 22-9669 FAX 22-9695

ハート型のびんがかわいい、今までのガラス容器にはないデザインです。個性的で、まず手にとってみたくなることは間違いありません。ガラス容器という、中身を際立たせる存在として、インテリア用途にもご使用いただけます。



ガラスびん容器 SS ハート



日本精工硝子株式会社
工場長 谷中 昌司さん

明治28年創業の弊社は、昭和61年に伊賀へ生産工場を集約しました。

ガラスびんには4千年もの歴史があります。「透明性」「利便性」「安全性」「機能性」「高級感」「重量感」、そしてリサイクル可能な素材だけで生産できるまさに「エコロジー」の優等生であり、長きにわたり世界中で使用されています。しかし、近年は私たちの身の回りからガラスびんがどんどん消えていっているという厳しく、悲しい現実があります。古いものに

は誰も郷愁を感じますが、郷愁からだけでは新しいものは何一つ生まれてきません。古いものの中に秘められた魅力、その本当の理由を現代に生きる私たちの視点からもう一度見直し、未来へ向けて再発信することが弊社の使命であると考えています。

弊社はこの伊賀の地で、歴史・伝統を引き継ぎつつ、未来への革新につなげる製品を生み出し続けていきます。

